

## 平成 29 年度「豊岡市地方創生戦略会議」 会議録

- 開催日時 平成 29 年 5 月 31 日（水）午後 1 時 30 分～午後 3 時 28 分
- 開催場所 じばさん但馬 2 階第 1 交流センター
- 出席委員 中貝座長、中嶋副座長、嶋委員、平田委員、太田委員、佐伯委員、永田委員、西垣委員、高宮委員、宮崎委員
- 欠席委員 村瀬委員、尾崎委員、岡本委員、笠原委員、木村委員、西池委員  
橋本委員
- 傍 聴 12 名

### 1 開会

### 2 中貝座長（市長）あいさつ

皆さん、こんにちは。今日も素敵な議論ができればと思っている。私たちも、皆さまもそうだと思うが、五里霧中の中でこの戦略をまとめ、進めてきたということがある。そうした中で、だんだんと私自身の中でもハッキリしてきたのは、この創生というのは、地方で暮らすことの価値の創生だ、創造だという風に、自分の頭の中でまとまってきた。この地方に暮らす価値とか豊岡に暮らす価値というものを実感しているからこそ、ここで誇りをもって生きているわけだが、少なくとも大学を卒業する時期の若い人たちには選ばれていない。価値が否定されているとまでは言わないが、いくつもの価値の順番の中で選ばれていない。そうすると、私たちは選ばれる価値、豊岡に暮らすことの価値というものをちゃんと作っていく必要があるのではないかという風に、だんだんと頭がスッキリとしてきた。しかも、この豊岡市の人口減少の最大の要因は、夫婦の数が減ってきていることもあるが、若い人が少なくなってきたことに尽きる。そうであるなら、若い人たちがここで暮らす価値というものを、きちんと作り上げて、どう届けるかということに作戦のエネルギーを集めていくべきでないかという風に考えている。

また、後ほど、副座長からご報告いただくが、2010 年から 2015 年の 5 年間に、若者の回復率はかなり改善している。5 ポイントくらい上がっていたと思う。ただ、性別ごとに見ると、男性が回復しているが、女性は若干回復率が落ちている。だとすると、同じ若い人の回復ということもあるのが、これから先は女性の回復率についてどういう効果的な手が打てるか、このことを考えていく必要があるという風に思っている。

そのことを思いながら、今、現場でいろんな仕事なり、或いは共同作業をやっているわけだが、少しご報告をしたい。例えば、城崎温泉の旅館はといった若い人に選ばれる職場になっているのかどうかという風なことも、具体的な議論が始まっている。コンサルティングをやる方々と、地元の旅館業の方々と、市の職員も入らせていただいて、そのところでどういう課題があるのかの洗い出しができています。例えば、この業界ではたすきがけと言うのだそうであるが、朝早くから仕事があつて、昼間は仕事が少なく、夜にまた遅くまで働く。そうすると、その働いている合計の時間は仮にまともだったとしても、こんな

働き方の職場に若い人は入ってくるのか。だとすると、ここを改善できるのではないかという議論になる。それから、観光業は賃金が低いと言われていて、両親に反対されるのはだいたい観光業ということも、観光業の皆さんがおっしゃっている。それで、給料を上げるために、労使の分配の変更ではなくパイそのものをも大きくしていけば、旅館の経営者もハッピーになるし、従業員も配分されてハッピーになる。こういうことをやらなければいけない。そのためには、安売りの観光業をやってはいけない。質を上げていって、その質にみあうだけの上代をいただいて、それを労使でもって分かち合うという方向に持っていくべきではないか。この様なことについて、具体的に話を進めているところである。

こういう風に突っ込んだ議論をしていけば課題がどんどん見えてくるので、より実効のある戦略を立てられるのではないか、作戦が遂行できるのではないかと思っており、そんなことを試行錯誤しながら進めているところである。

最後に、専門職大学の現状についてお知らせする。これは、関連の法案が通り、法律として成立している。専門職大学は、職業教育を提供する高等教育機関であって、豊岡市は県に対して4年制の高等教育機関を豊岡に設置してほしいという要望をしてきた。兵庫県では、関連の予算、調査費が計上されていて、豊岡市も調査費を計上し、県と市で共同して構想を作っていくということで協議を進めている。どういう形態にするかということであるが、全国や世界からこんな片田舎に学生を呼ぼうとするなら、豊岡市の強みを発揮できる分野でなければいけない。或いは、豊岡市が強く求めているもの、提供できる分野でなければいけないということで、観光コミュニケーション等からアートマネジメント関係ということで話をし、井戸知事もそれで行こうということをおっしゃった。恐らく、今度の公約の中にも入ってくるのではと期待もしているが、確実に動き始めているところである。私の公約には2020年には必ず実現すると書いているが、実現するためには相当いろいろな課題を解決しなければいけない。しかし、それくらいのスケジュール感をもってこれを実現していきたいという風に考えている。

設置が実現すると、学生が町をウロウロする。平田さんの言葉を借りると、アーティストのような変な人たちが町をウロウロする。そして、また卒業生の変な人たちが町をウロウロする。このことが町に与えるインパクトというものは、非常に大きいのではないかと考えていて、この地方創生の中の戦略的なプロジェクトとして、是非実現していきたいと思っている。

近況を述べた。今日は報告もあるが、できるだけ「今後どうしたらいいのか」ということの議論をさせていただきたい。よろしく願います。

## 2 議事

- ・ 座長           それでは議事に入る。まず「地方創生総合戦略第3版に盛り込む内容について」を議題とし、事務局から説明する。
- ・ 地方創生課長   この会議は1年ぶりとなる。本市の地方創生は、先ほど座長の話の中にもあったが、大きな目的を掲げている。それが、「豊岡に暮らす価値を認め、豊岡で暮らすことに自信と誇りを持って住む人が増えている」の実現である。この大きな柱・目的に沿って、2つの柱を立てて進めている。

ひとつは、「移住・定住を促進する」こと、これを戦略Aと呼んでいる。もうひとつは、「未婚率の上昇を緩和するなどして、子どもの数を増やす」、これを戦略Bと呼んでいる。今日は、今年度に行おうという取組みをまとめた「地方創生総合戦略第3版（案）」を資料3としてお手元に配布している。これは、前半、だいたい10頁くらいまでは考え方の根幹の部分であるので、特に変更は無い。後半の方に、今年度または今後やろうとしていることを、A戦略・B戦略ごとに載せている。これを逐一説明すると時間が足りないので、今日は、これまでの取組みを踏まえて今後どう進めていこうかというものをまとめた資料1を中心に、ご説明申し上げたい。

説明に入る前に、用意している資料について確認させていただく。今日は、資料1から資料5までの資料を用意している。

まず資料1は、今申し上げた戦略A、戦略Bという順番で、これからどうしていこうかというものを取りまとめたものである。資料2は、2015年に実施された国勢調査の分析結果を副座長にまとめていただいたものである。資料3は、総合戦略第3版の「案」である。次の資料4は、地方創生の進捗を、数字、成果指標で見えていこうということで作ったものである。それから、資料5については、今申し上げた指標について、一部、変更しようというものである。その理由は、残念ながら数字を取れなくなってしまったもの、或いは、もっとより良い指標が見つかったもの等があり、一部を変更しようというものである。

以上で、資料の説明について終わらせていただく。では、まず、移住・定住促進の戦略Aについて、UIターン戦略室からご説明し、その後、結婚促進・多子出産促進の戦略Bについて、ハートリーフ戦略室からご説明する。

## (1) 地方創生総合戦略第3版に盛り込む内容について

UIターン戦略室、ハートリーフ戦略室から資料1に基づき説明

- ・座長           では、ここまでのところで、何かご質問・ご意見は？  
                  続いて、資料2の国勢調査の比較の方の分析を、副座長から報告いただき、それを踏まえた上で再度、議論する。

## (2) 2015年国勢調査結果の概要について

副座長から資料2に基づき説明

- ・座長           今のご報告について、何かご質問・ご意見は？
- ・委員A         未婚率というのは、いわゆる生涯未婚率とは別の統計数値か？

- ・副座長 生涯未婚率ではない。
- ・委員A 今の時点で結婚していない人か？
- ・副座長 やはり子どもの産める年齢期に結婚しておいていただきたいので、45 歳ぐらいまでの間でまだ結婚していない全てをとった数字である。
- ・委員A シングルマザーも未婚に入るのか？ 生涯未婚率では、1 回でも結婚した人は入らないので、もう少し低くなると思うが。
- ・副座長 そうである。生涯未婚率とすると、もう少し低くなる。
- ・委員A それにしても、未婚率が異常に高いと感じる。
- ・座長 これは、ほかの地域、日本の平均と比べたらどうなるのか。豊岡の未婚率がどれぐらいの水準なのか、豊岡は他に比べて突出して高いのか。
- ・ハートリーフ戦略室 生涯未婚率というのは 50 歳の時の未婚を言うが、全国的には、男性はほぼ 4 人に 1 人くらい。おそらくそれほど変わらない。
- ・副座長 突出しているということはないと思う。一般的には都市の方がもう少し未婚率が高いので、まち中だともう少し悪い可能性がある。ただ、豊岡のまちの規模とか地域性を考えると、若干期待的なものも入るが、もう少し低くてもいいだろうと思われる。
- ・座長 それでは、全部を通してフリートーキングをさせていただきたい。ご質問、ご意見はいかがか？
- ・副座長 一つ確認だが、戦略 A の方の A 3 用紙の第 2 版 2016 年度の事業内容のプランと 2017 年度第 3 版のプランと比べると、中にはただ単に表示されている場所が変わっているというものもあるが、表示が消えたものも大分あるように見える。これはどういう発想で整理し直されているか説明していただきたい。
- ・UI ターン戦略室 まず、これはきちぎち詰めると目的が違っているということで配置を変えているものがある。あと、2 版から 3 版で止めたものというものは、ほぼ無い。2 版から 3 版の差異は、赤字のところは純粋に増えており、青字のところはさらに検討しようとしている状況である。
- ・副座長 事業を新規に立ち上げていく時の予算化のプロセスというか、止めていくプロセスで明確なものはあるか？ こう評価してこう駄目だったら、この事業は次年度はやらないと決めるプロセスで、一般的なものはあるか？
- ・UI ターン戦略室 一般的というほどのことではないが、効果が無かったら止めようというものはある。例えば、先ほどの説明にあったように、東京でコミュニケーション教育とか親子運動遊びの教室をやった。実は、去年の夏に、豊岡に来てもらって、湿地で生き物調査をすとかそういったことをやったが、「なかなか豊岡に来てもらうのはハードル高い。」という感触を持った。これは 1 回やったがもう止めにして、情報を東京の方に届けるのなら東京で実施した方が良いのではと考え、変更した。目的と KPI を踏まえ、これは止めたほうが良いというものは即座に見直すようにはしているが、一般的なルールは持っていない。

- ・副座長      もう一つ、戦略Bの方についてである。過去のこの会議でも何度か申し上げているが、この分野を一生懸命頑張って成功したという事例はほとんど無く、多くの専門家はあまりお勧めしない。行政サービスの色が出てしまえばしまう程、やはりきな臭い感じになるというか、その利用を躊躇されるということがある。このため、できるだけ自然な形で、できるだけ遊び心でやっていただければというのが極々一般的なレベルのコメントとなる。もう一つ、3本柱の最後のところで、若者を集い交流させるというところについてである。今のところ情報共有・情報発信の後方支援のような機能と説明があったが、私はこのあたりを結構重要視していて、キーになってくるのではと思っている。ぜひぜひ検討していただきたいのは、この限界で、ものすごく元気に遊んでいる人がどこにいるのかを突き止めていただいて、そのキーマンになっている人たちとの連携をぜひ考えていただきたい。あの辺でやたらとスポーツに勤しんでいるグループがあるとか、これは私が神戸で直接関わっているものだが、社会人のフットサルのチームであって、そこの幹事の人たちが非常にしっかりしており、どんどんと若い人たちをリクルートして、どんどんとメンバーが増えている。そして、そのチーム内でどんどんと結婚している。例えば、そういうことである。

あそこに飲んでいるグループがいる。この辺でいつもスポーツを、あの辺でバーベキューをしている。そのキーマンたちを繋いで、少しこういう意識で若いメンバーにもうちよっと声をかけてあげてとか、そういう情報があったら他にも共有したいから知らせてねっていうような。そういう情報を、LINE だったりとか Facebook であるとか有機的に積み上げて繋ぐということをした方が良いのかなと思った。

- ・ハートリーフ戦略室    今のご意見は、しっかり受けとめたいと思う。
- ・委員A      は一とピーの部署の方はすごく熱心にご協力いただき、たぶん成果もすごく上がっていると思う。しかし、行政にはよくあることで、その部署では成果が上がり KPI も達成されているけれども、それが他の政策の邪魔をしてしまう可能性は当然にある。僕が全国の色々なまちづくりのお手伝いをしていて、非常にわかりやすい例で言うと、「よさこいソーラン」をどうするとか各地で問題になっている。「よさこいソーラン」は、その場ではすごく盛り上がり、おそらくそこで出会ったカップルもたくさんいると思われる。しかし、「よさこいソーラン」でまちづくりをしたことによって、離れていく層が一定数ある。「よさこいソーラン」をするまちはダサイというイメージが付いてしまい、それで帰ってこない、恥ずかしいと思う層が一定数ある。要するに、副座長がおっしゃったとおり、行政が婚活パーティーをやるまちは、もうダサイのである。申し訳ないが、その冷徹な認識は必要で、要するに、戦略Aと戦略Bが矛盾しないように、行政全体がどう見積もっていくかということがとても大事であり、頑張るだけではなくて整合性のとれた戦略にしていくことが大事だと思っている。だから、仰ったよう

に、まさにここは若者の集いの交流をさせる。できるだけ行政が前に出ない。これが婚活ということさえ匂わさずにやるのが大事かと思っている。そのセンスがまさに問われるのかと思う。

・座長 今、「よさこいソーラン」がマイナスポイントということだが、例えばプラスのイメージを持つものは、どんなものがあるか？

・委員A それは難しいが、ただ、小豆島のようにハイ・アートというのは一つある。少なくともマイナスのイメージは無いが、プラスになるかどうかは人それぞれである。やはり、高校で1回外に出る。大阪なり京都なり東京なりに出て行く子たちが、誇りを持って出て行ってくれるかどうか大きな要素であるので、そういう誇りを持てるまちづくりをしないと、長期的な意味での人口減少対策にはならない。

・委員B 戦略はどれも非常に練られていると思っているが、その効果はどれぐらいのスパンで見ようとされているのかが分からない。特に、人口減少を食い止めるとか、例えば、今市長がおっしゃったような働き方の改革というところで期待しようとしているところとか。具体策が出てきたり、実際の効果が表れるのは、半年・1年のレベルではなく、たぶん4年とか5年とかかかると思う。その間も、一方で短期的にやらないといけないことをしながら戦略を打っていく。今回の戦略についても、例えば、豊岡市がやっていることは、ずいぶん全国的に浸透して来ているのではとプラスに感じている。あのポスターでも反響を呼んだり、サンデー毎日に豊岡市でこれやっているって書いていただいたり、他のところでもたくさん見る。そういう意味では、我々がやろうとしていることが、少しずつ伝わっているのではないかと。ただ、それが実際に数字として出るには、もうちょっと時間がかかるのではないかという気がしている。

今、数字に出ないから止めるとか、具体策を変えるというのは、どのタイミングでやるのかを考えないと、逆に見誤ってしまうのではないかというのが一つある。

あと結婚について少し思うのだが、漠然としたイメージではあるが、地元同士に対して、みんなもう半分諦め感があるのではと思っている。地元同士でも互いに知らん人はいる訳だが、地元同士はもう結婚する人はしているし、これからガツガツやってもそんなに増えないのではという気がしている。地元の外、外部の人と接する機会を持っていかないと、新たにそういうのに行こうというモチベーションは上がらないのではと危惧している。こういった活動は、2回、3回と出ている方がおられる一方で、全然出ていない方もいる。出られない方は、何となく「もう地元だったらいいや」という層があるような気がしている。そういう意味では、意識的に都会の人とかほかの地域の人とか。都会の人でなくても、例えば京都北部ですとか鳥取とか、そういったところが良いかもしれない。そういうエリアの人と交流するような仕組みとかあった方が、お互いに良いのではという思いがある。

- ・副座長        その雰囲気は、外からときどき帰ってくると、感じるものがある。諦めた感とか草食とか。先ほどの私の資料に、転出・転入の矢印を書いているものがある。どういうところと交流しながら、どういうところから来てもらっているのかを見て、ものすごく大きく転出超過になっている大きなまちを相手にすると、こっちの方が体力が弱いとか、草食そうなので、もう少し日本海側を攻めたい。肉食なまちになっていただきたい。
- ・委員A        これは全国的な傾向であるが、前もこの会議で申し上げたかどうかわからないが、高校の輪切りの問題がどこでも非常に強い。豊岡のように3校、4校ぐらいしか高校がないと、高校進学時点で人生が決まったように思ってしまう。もちろん個人の問題であるが、現実にはそうである。だから、これは市長ともお話ししたが、県立高校なので難しい問題はあるが豊岡総合高校にできるだけテコ入れして、豊岡高校にも行けるけど自分で自主的に豊岡総合に行くという子が2～3割出てくると……。輪切りをシャッフルするというのは、まちづくりの基礎的なことである。各段階でとにかくやれることを全部やっていく。その一番の大きな目玉は、大学の誘致だと思う。下から積み上げて行ってということになるかなと。
- ・委員C        戦略Bが、賑やかな「家庭」を持つと書いてあるのがちょっと引っかかる。別に、子どもと母親だけでも楽しい家庭はつくれるのではと思ったりする。子どもだけは欲しい女子は結構いるのではと思っている。
- ・委員A        LGBT も含めて特区を取られたら良い。LGBT の方たちも養子を必ずもらうので、養子制度を認めてしまえば良いと思う。
- ・委員B        シングルマザーは旅館業で多く受け入れている。
- ・委員A        城崎は特にそうである。城崎小・中は、極端にシングルマザー率が高いが、校長先生に伺うと、そういう子どもに対するいじめは全然ない。みんなが当たり前だと思っている。だからそういうまちで。
- ・委員B        それは良い。
- ・座 長        城崎の旅館側は、労働力対策としても有益ではないか？
- ・委員B        そうである。シングルマザーも大歓迎している。
- ・座 長        そこをサポートできるような体制というのは、城崎にあるのか？
- ・委員B        ただ、子どもに対するケアという面では、まだまだ手薄である。そういう方に来て欲しいが、彼女らが働こうと思っても、その間に子どもの面倒を見ないといけない。そういったところがちゃんとできているかといったら、全然手薄かもしれない。
- ・委員C        そこですごく羨ましいのが、城崎のこども園は、日曜日も預かるシステムがある。竹野町から見ると、すごく羨ましいと思っている。
- ・委員B        確かにそうである。もっともっと、何かそういうことを……
- ・座 長        旅館組合で取り組んでみては？
- ・委員B        良いことではある。

・委員D

それに関連して、ちょっと逆の発想になると思うが、結婚適齢期の方が結婚しないというところが問題だということであった。今、社会学の本をすごく読んでいて、結婚の話題がすごく多くある。結婚したいけれども結婚イコール子どもを産まないといけないという社会観念が強すぎて、とにかく2～3年以内に産まないとおかしいか、なんかそういう風潮になりつつあると。これをなんとかしないと、結婚するカップルも出ないのではということであった。

さきほど、7割の女性が働いていて、4割が結婚していないという話があった。しかし、ギリギリになって産みたいと思う方が増えてくるような気がしている。であるから、適齢期に結婚・出産ではなく、適齢期に結婚をちゃんとして、子どもを後で産んでも良いよという考え方を定着させるのも一つの手法ではと思いながら、今まで話を聞いていた。働きたい人はちゃんと働いて、落ち着いたらちゃんと子供が産めるような、社会システムというところが一つあるのでないか思った。

ちょっと話が変わるが、この前、Iターン・Uターン者の中でいろいろ話していて、コウノトリのキーホルダーがすごく効力があるという話題があった。これを贈ると、結構妊娠する人が増えていると。コウノトリ本舗でも「子宝」と大きな看板が立っている。だから、教育移住という話があったが、そういった出産移住というような考え方も、この豊岡市はできるのではないかと感じた。安心して子供が産め、周産期医療センターもあるしコウノトリもいるし、子育てもちゃんとできそうなイメージ的なもの。やはりイメージというのもすごく大切な一つの要素だと思うので、そういったイメージの発信というのも今後展開したら面白いのではという風に、二つの観点から思った。

・副座長

このまちをしばらく離れているので、このまちの中にある結婚に対する考え方とか、結婚したあとの考え方とか、私にはわからないことがあるかも知れない。今度、大学生たちに結婚の意味と意義、結婚式をやる意味と意義について自分たちで考えて、若い人たちがより結婚に対して良いイメージを持って、それから自分たちが思い描くこれからの式のあり方を考え、さらにそのことをビジネスに繋げるビジネスプランを英語で発表する全国のプレゼン大会をしようと企画している。

豊岡だけではないと思うが、但馬地域、山陰地域にある結婚という考え方に対して、若い人たちがちょっと否定的・悲観的になっている面があるのではないかと。さらに式とか色々考えると、「あんなんがあるんだったら結婚したくない」とか、そういうサイクルで悪いイメージが付いてしまったら、この地域の若い人たちが自身も、自分たちはこういうふうな結婚式だったら挙げたいと思っているとか、こういうふうになりたいと思っているとか考えてもらうような機会を与えてあげたほうが良いと思う。また、それに対してこの地域の方々がどれぐらい寛容であるかということ、それは先ほど



シングルマザーの方々を受け入れて、あまりお節介にならない程度にはサポートするし、ウェルカムだし、そういうところが必要かと思う。

・委員E

先ほど、行政が婚活をするのはダサいという話があった。それは一つあるかもしれないが、行政がするからというよりも、豊岡市で婚活をするよと宣伝をすると、もしかしたら知り合いに会うかもしれないから嫌だとかいう女の子が結構いて、私たちも女の子を集めるのが大変である。でも、逆に行政がやっているから安心して参加されるという方も、この豊岡市には多いと思われる。うちは民間でやっているが、途中から豊岡市に後援についていただいてから参加者が増えた。やはり、行政が認めているのなら、まあまあ怪しいところではないというような安心感を参加者の方に感じとっていただけるといい。この部分で、行政がこういうことをするのも大切な一部ではあるかと思う。

はーとピーはずっと回を重ねているので、こういう安心感というか、はーとピーが婚活をして当たり前というような風潮が豊岡にある。そういう安心感を与えるためにも、これはこれで続けるのはとても良いことだと思う。うちでも参加されていて、合コンというよりも、だんだんと「こういう女性がいるんだけど、この子に合う男の子はいませんか？」というお問い合わせとか、「こういう男の子がいるんだけど、この子に合う女の人はいませんか？」というお問い合わせが結構増えてきている。だから、今回ハートリーフが行う「縁むすびさん」をするというのは、ちょっと今の流れに合っていると思うので、うちもスタッフたちを「縁むすびさん」に登録させて、ぜひ参加させていただきたい。

いつも思うのは、先ほども出てきたが、男性が草食というお話があって、本当にそうだと思う。うちも毎回、直前になってから「僕は何着て行ったら良いですか？」とか、いろんな相談があって、ああやっぱりそこからですかと思ってしまう。先日も市長にちょっと話したように、男性を教育することが必要である。私たちが講座をやっても良いが、聞くばかりではなく、やはりコミュニケーション術の教育をぜひ行っていただきたい。男性を教育するコミュニケーションの演劇で、自然に男性が言葉を発せられるような、自分から声をかけられるような、そんな講座をやっていただけたらやはり楽しいし、参加者は、婚活だけではなくて働くという職場でのコミュニケーションにも役立つ。更には地域の人とのコミュニケーションにも役立つので、豊岡の人を育てるという意味で講座をやっていただけたら助かる。

・委員B

やってやれないことはないが、20歳過ぎてからは・・・。

・委員F

今の話の流れからは逸れて、学校現場からの感想をお話する。直感で大変申し訳ないが、僕は2000年に豊岡小学校の教員として来た。それで、一昨年まで6年間校長としていたが、2000年に総合的な学習というのが導入された時に、初めてバーチャル同窓会を6年生にさせた。これは、自分が成人になって社会に出た時に、何処にいてどんなことをしているのかを、

バーチャルで話すものであった。その時は、ほとんどが豊岡にいなかった。ところが3年前に同じ豊岡小学校の6年生という同じデータベースでいくと、数字が手元に無いから正確ではないが、2～3割が豊岡に残って仕事をしているという結果であった。2000年にやった時も、別に豊岡でもできる仕事であっても神戸にいてやっているとか、東京にいてやっているというのが、3年前は豊岡で美容院をしているとか、スキー場で働いているとか、そんな声が出てきた。先ほどの副座長の説明で、若者の回復率が少しずつ回復してきているというのは、実はふるさと学習の成果でもあるのかなと感じた。2000年の時には、ふるさと学習なんて言葉は学校ではほとんど聞かなかった。ところが、最近では当たり前のように聞こえてくる。ましてや、今年からはカルキュラム、学習材も資料も揃えて、知るだけではなくて、豊岡で起こっている出来事について自分なりに評価をしようと、そういう学習ができたらなど。心強くこの数字を捉えたという感想である。

- ・副市長           そのテストというのは、評価は毎年やっているのか？
- ・委員F           たまたまである。2000年にやった子たちは作文に残して、今豊岡小学校の3階にその資料が置いてある。それを見たら本当にびっくりするような数字で、校長先生と一緒に見て驚いた。
- ・副市長           あれば評価指数になるのではと思って尋ねた。
- ・委員F           もう一つは、これは視点が変わるが、今ずっと校長先生たちと面接をしながら自分の学校の子どもたちの評価について見ている。共通して言えることは、自尊感情（セルフエスティーム）が低い。自己肯定度が低い。国際的な調査をすると、やはり日本は低い数字が出る。豊岡だけではなく、47ヶ国調べて43位だというデータがある。これは自分に自信がない、自分の良いところが言えない、自分の学校の良いところが言えない、自分の住んでいるまちのことに肯定的な評価ができないという段階が踏まれているのかなと感じている。学校では、自尊感情をどう高めるかっていうことを大きな視点にしてやっていくことが必要である。豊岡のことを、自信をもって語れるとか、地元を出るけれども自信を持って出られる子どもを育てるということが、私たちの目指すところだなど思っている。
- ・座長            今の話と、高校の輪切りの話というのはそのとおりかもしれない。では、どうしたら良いのかということになる。
- ・委員A           自尊感情あるいは自己決定能力とまちづくりは車の両輪だと思っていて、全国で講演会をすると必ず質問に「そんなコミュニケーション能力とか付けたら、もっと東京に行ってしまうのではないか？」と質問が出てくる。どれだけ自分のまちに自信がないのか。要するに、今地方出身で東京にいる子たちの半分は自分の意思でいるのだが、半分はなんとなくいるのだ。どう見ても冷静に考えたら、「君、地方に戻ったほうがいいよ。」と言える20代の子はいくらでもいる。ちょっとだけ賃金が高いからいるだけで。地方の方が大変であるので、色々な世間との付き合いとか全部しなくてはいけ

ない。それが面倒で東京・大阪にいるのであって、自己決定能力とか自尊心を育てないから、なんとなく東京や大阪に出て行ってしまふ。問題は自己決定能力をつけること。しかし、それでまちがダメであったら、今度は戻って来ないでもっと良いまちに行ってしまうので、あとは選ばれるまちにする必要がある。これは、車の両輪である。両方を作らないと、いくら良いまちづくりをしても子どもたちの教育をしっかりとしなかったら戻ってこない。これはもう、二つ同時にやっていかないといけない。

・委員G　　今の話に関係すると思うが、私は相談というかたちで思春期のお子さんに出会うことがある。そこでは、全員とはいかないがかなりの多さで但馬に残りたいと言う子がいる。その子たちが但馬や豊岡に残りたいという理由は、大きな夢を持って残りたいというよりは、出たくない、怖いというか、すごく消極的な気持ちで親から離れたくない、自宅から離れたくない、地域から離れたくない、友達から離れたくないから但馬に残りたいという意見が一定数変わりなくある。豊岡に残っているからといってエネルギーがすごく大きいかといったら、そうではない方も結構ある。相談に来られる方なので、モチベーションや色々なことが低い思春期のお子さんであるので、余計にそういう傾向が強いのかもしれないが、ただそういう方も多いということが実感である。なので、むしろ、東京や大阪に自分の夢を持って出て、いずれ帰って来てほしいと思っている。

・副座長　　おっしゃることは、すごく良くわかる。だからこそ3月のポスターのメッセージがすごく適切だと感じている。このまちとして、「元気に出て行って勉強してこい、経験してこい。でも、帰っておいで」と。それがこのまちのスタンスとしては良いのではないかと。成功しているところは、やはり地元の教育がしっかりとしている。

まちでこんなに活躍している人がいるというのもそうであるが、このまちはこんなに大変だっという課題も、ものすごく刺激として子どもたちに与えている。子どもたちがなんとなくぼんやりと都会に出て勉強するが、なんとなく地元のことを気にかかっている、勉強したことが何か活かせるのではないかという子たちが帰って来ると思う。まさに、その子たちが帰って来て、例えば、漁業のまちが寂れてきている、そこへ冷凍の技術を学んで帰って来たりとか、そういうのが成功の起爆剤である。それを高校ぐらいまでの間に、しっかりとまちの良いところも悪いところも含めて、こんなまちにあなたたちは暮らしています、こんな良いところがあるけれども、こんなに悩んでいますということを知ってもらいたい。それで、さきほどの輪切りの話だが、各高校にそれぞれ選ばれて入っていて、それぞれの少し違ったフォーカスがあるので、コアな部分はやっていただくにしても、地域教育みたいな部分ではもう少し学校の輪を超えて一緒にやるとか交流してやるとかを意図的に造った方が良いという気がする。県も協力はしてくれるのではと思う。

- ・委員A      私は、今年度から総合高校で授業を持つ。夏の講習会とかで高校連携で授業をやっている地域もあるが、徐々に、県立高校なのでなかなか手が出しにくい、そういうことは進めていけるのではないかと考えている。あとは親の感覚である。今、地方の商業高校とかすごいレベルの高いところが出てきて、岡山の津山商業とかから岡山大学に結構行っている。でも、まだ親の側に普通科信仰があるので、親のイメージも変えていかないといけない。そのためには、成功例をとにかく出して、そのためにも総合高校を豊岡市としては少しえこ贔負してテコ入れするのが隠れた戦略だと思う。
- ・座長      次は、出石高校か。校長先生がすごい危機感を持っている。県教委は県全部を見ていて、しかも彼らは瀬戸内側にいるのでイメージがまったく沸かない。豊岡の高校であるので、豊岡市が応援をして一緒になってやる。出石なんかは芸術系を持っているが、現場の先生は頑張っていると思うので、もっともっと一流の講師を呼んで来て、その中で子どもたちが、自分たちが学んできたことはすごいことだ、みたいな気持ちになればと。総合高校にもそういう思いが出てくると、輪切りの中でできた心の中のわだかまりみたいなことも少しでも取れるのではないかと思う。あと、幼稚園での英語遊びを見て驚いたのだが、単に英語を身に付けさせているだけじゃなくて、英語の向こうには表現する文化みたいなもの、風土みたいなものを植え付けている気がする。演劇は演劇でまた、勉強ができる子でない子が妙に能力を発揮したり、ダンスをやると、まったくそうでない子が表舞台でやるということがあったりすると、今までの価値の序列みたいなものを、みんなが考え直すことができるのではないかと。自分の心の中に輪切りみたいなものを、どれだけ無くしていけるかというのは、今いる子たちには大きい気がする。だんだん色々なものが繋がってきている気がする。
- ・委員G      今ターゲットにする年齢とは離れていて、高い年齢のことになってしまいうが、年をとってから安心して暮らせるまちであってほしいと思っている。たぶん30代、40代ではそこまで考えないから、私たちがターゲットにする人にどれだけ影響があるかわからないが、自分が年をとって一人になった時に、安心して最期まで住める豊岡ということも大切である。
- ・座長      とても大切なことのお話しされているが、地方創生との関係でいうと、どう考えたらいいかは、これはこれでご意見があると思う。そのへんはいかがか？
- ・委員C      私は、このUターンやIターンは、結局のところ根っこは一緒なんじゃないかなと最近思っている。豊岡に帰って来る魅力があるから帰って来るのであって、Iターンの人は、豊岡に他のまちにない魅力があるから来たいと思うのであって、それは何かと突き詰めて考えていく必要があるのではないかと思う。先ほどもあったが、東京で親子運動遊びとかコミュニケーション教育の体験会を開いたらたくさん応募があったという話もあって、すごくいいなと思った。一方で、湿地での生き物調査は応募が少なかった

のか、無くなったというのはちょっと残念な気がした。やはり豊岡にはコウノトリが一応財産としてあるわけなので、それを魅力として、そこをもっと強調してIターン誘致とかUターン誘致を進めても良いと思う。他にIターンやUターンの行き先というのは全国にあって、魅力のある都市もたくさんあると思うが、その中で豊岡を選んでもらうにはどうしたら良いかというところだと思うので、城崎でアートに突出することも、出石の永楽館の芸術に突出することもすごく良いことだと思っている。そういう豊岡の魅力をどんどん磨き上げていくことも大事だし、それで帰って来た人とかIターンでやって来た人が、実際その人たちのまわりにたくさんの若い子とかが集まって来ていると思う。少しずつコミュニティができていますので、さっきも副座長がおっしゃったように、そういうコアになっている人ともう少し協力してできるような体制を作ったら良いのではないかと。

・座長 さっきの湿地の話は、それ自体は豊岡の魅力であるが、東京からわざわざ試しに来てもらうことがどうかということ、それがとても大変だったので、こちらから攻めていくということである。であるから、湿地やコウノトリ自体の魅力はわかっているが、事業の進め方として、まずは攻めていくこととしたということをご理解いただきたい。

最初にあいさつで言ったように、豊岡で暮らすことの価値を創造するというのは、言い方を変えれば豊岡の魅力を磨いてどう伝えるかと思っている。そのへんは、みんな同じ考えと思う。高齢者でも安心して暮らせるということは、最初の議論としてすごく大切な議論であるが、若い人が減っているということが人口減少の最大の要因だとすると、ここをどうするかということにエネルギーを費やしましょうということになる。その時に、例えば年とっても元気で住めるようなまちに若い者が住むのかと言うが、おそらく若い人は見てないだろう。だから、一度はこの議論からは外した議論ではあるが、改めて本当にそここのところは関係ないのかどうかについては、少し宿題にさせていただきたいと思う。ちなみに、そのような不安は皆にあって、実際日本中そうである。だから、地域包括ケアシステムをどう作り上げるのか、医療の方はどんどん力を弱めていく、医療も介護であるとか福祉であるとか、地域のコミュニティでもってどう支えていくとかか仕組みを実際これからつくらなくてはいけない大問題となっている。それにどう答えられるか、ということだろうと思う。他にいかがか？

・委員A 私が東京の学芸大でやった講座の最後に、いくつか豊岡の政策を説明した。そこには、4~50人のお父さんお母さんが来ていて、何度かどよめきが起こった。東京でこの水準のこを受けようと思ったら、お金を払わないと受けられないようなことが、豊岡では、すでに全校で実施されている。英語にしても幼保のからだづくりにしてもコミュニケーション教育にしても、お芝居とか永楽館での狂言とか何度も無料で観られるものがたくさん用意されている。それは豊岡という、ちょうどいい8万人の自治体だからでき

る施策である。それより大きいと全校実施は相当難しいと思えるし、これより小さいと今度は財政規模が小さくてできない。このちょうど良さというのは、なかなか数字を言っても理解されないが、一覧をつくってこれだけのことを子どもたちは無償で全部受けられると伝えれば、それはすごくアピール力があつた。そういうところが、東京のある種の意識層にはアピールするということは、手応えとして間違いない。

- ・委員B 城崎温泉は有り難いことに今増えているわけだが、うちも海外のお客さんがたくさんお見えになって毎日接客している。かにシーズン以外に来ていただける面も有り難いが、海外のお客さんを積極的にやりたいと思っている理由は、来られて対応するのが楽しいからだ。それから、帰る時に「すごく良かった。」と言っていたケースが多く、日本人のお客様はなかなかそういうふうには言ってもらえない。海外の人は、特に欧米の人は、Wonderful!とか、もう色々と言ってくるわけである。そうすると、だんだん変な自信がついてきて、「うちの旅館てええんちゃうか、城崎って素晴らしいんちゃうか」とか、自己肯定力が高まってくる。実は、それはすごく重要な事だと思っていて、だからよりそういうお客様とのやりとりに意欲が沸く。いろんな国の方が来られるので、色々新たな発見があつてすごくおもしろい。

体系的にできるかどうかかわからないが、豊岡の高校生に、1回そういう場面で、チェックインとかチェックアウトの時に外人とコミュニケーションをとって見たら、「この地域ってこんなふうに見られているのか」とか、そういうふうなことがすごくわかると思う。地元が良いと地元のおじさんが言っても説得力が無いが、外から来たお客さんが言うと、多分すごい説得力があると思う。別に城崎だけでなく、豊岡の鞆にしてもきっと実際のものを見てお客さんがすごく喜んでおられる現場なんてたくさんきっとある。地元の鞆メーカーの人が豊岡の鞆すごいと言うことだけでなく、実際に感動している場に学生さんとか地域の人が立ち会っていると、そういう場が増えたら、もっともっと地域に対する理解とか愛とかが深まるのではないか。

- ・委員A 今、総合高校と城崎の旅館組合では何もしてないのか？
- ・委員B していない。
- ・委員A 成功している商業高校は、みんな地元の和菓子屋さんのところでスイーツを開発したりそういうのをやっていて、そういうののトップに立っている子がみんなA0で地元の国立大学に行くのが、今、本当に全国のトレンドである。豊岡総合は結構元からレベルが高いから、全然できないことはない。
- ・座長 例えば、ビクトリア市に英語キャンプに行ったような子が、あとはそれこそインターンシップで夏休みに城崎で実際にやってみる。特に外国のお客さんが多いと思うが、良いかもしれない。

- ・委員B 単純にそういう人とコミュニケーションする訓練というか、慣れる場数もないといけない。
- ・委員A ビクトリア大学から去年7名来て、お試しで10日間過ごした。2人が今年帰って来たので、相当に高い確率である。1人は1年間、もう1人ももしかしたらそのままいるかもしれない。今年はまだちょっと多くの人がある。この確率でくると相当戻って来てくれる。1人は中国系のカナダの学生なので、英語、中国語ができて日本語ペラペラで、カナダの学生もフランス語もカタコトできる。非常に良い人材が戻って来てくれる。30年後に城崎の若旦那衆の半分がハーフになっているのが僕のKPI。
- ・委員D 外から褒められると自信がつくという話があったと思うが、平田先生の本を読ませていただいて、これを高校生が読んだら、本当に誇り持つだろうと思うような内容であった。読んだあとに次の本を読むと、地域文化が若者を回帰させるという本だったが、今度は東井義雄さんの話が出てきて、豊岡ってすごいなと思った。これだけ偶然取った本にどんどん出てくるまちって、そうないだろうなと思った。やはり情報発信がもう少しうまくいけば、もっと地域に残れる人材が育っていくのではないかなと思った。外に出て地元が見えると思うが、例えば今よく京阪神に行くようになったが、電車の中でまちの案内をしていて、次は城崎温泉となったときに、日本語のたどたどしい説明がある。これがちゃんと、英語で上手く言えるようになったら、豊岡に行くとこんなアナウンスが聞けちゃうなんてすごいなというようなことになる。また、高速が折角豊岡まで来ているのに、大阪から日高まで開通するという看板をまだ見てない。あれはすごく勿体ないことだなと。近くなっているのに、そういったことがPRできていない。例えば、関係人口の話になると思うが、まだ豊岡までは不便だという概念で丹後に流れている人も当然いるであろうし、但東回りで豊岡に入ってくる方もいる。そのへんも上手く、折角社会基盤が整いつつあるのに、うまく情報発信ができていないから、不便な所だとイメージが付いてしまうのかなと。例えば、兵庫県がデスティネーションになりにくいというデータがある。それは、兵庫県には色々な魅力があって、高知の土佐とかカツオとか龍馬とか、そういうふうにならないらしい。日本の縮図と言えるぐらいいろんなことがあるので。豊岡も永楽館とか城崎温泉とかアートセンターとかコウノトリとか城下町とか、色々なことがあるが、これがうまく言えてないような気がする。もう少し尖った情報発信戦略が必要じゃないかなというふうに思っているところである。

人に関してはすごく良い地域であるから、愛情あり、信頼関係を築くものばっちり、利益で人が結びついているところじゃないと思うので、そういうことが上手く機能すれば、あとは任せて住んでもらったら絶対良いところだよというふうに言えて、また帰って来る人もIターンの人も増えてくるような気がする。

- ・座長 今日3時半には終わりたいと思うので、あと6分か7分ぐらい議論を続けたい。
- ・副市長 ちょっと気になったのは、戦略体系図そのものも、このままでいくのかという議論があると思っている。Bの方を見ていると、「若い夫婦の数が増えていて、夫婦一組あたりの子どもが増えている」のは、なんとなく我々の世代の発想で見ているのではないかという気がして、そこがたとえば、結婚は素晴らしいと考える若者が増えているとか、子育てが素晴らしいと考える若者が増えているとか、そんなふうでもいいのかなと思って、ちょっと検討してみたらどうかと思ったが、いかがか？
- ・座長 これは作法として置いてある部分だ。さっきも担当が言っていたように、ここに力を入れるつもりはあまりない。むしろ夫婦の持つ子どもの数は増えているとすると、これまでのやってきた方向性で間違っていないのではないか。問題は減っているほうなので、本当はここをやりたいのだけれども、子どもの数を増やすということをやると、夫婦一組あたりの子どもの数を増やすということが外せない。たぶん今、担当のほうはそれぐらいの気持ちだろうと。
- ・副市長 なんとなくこういう因数分解の仕方をすると、発想がその中で固まってしまいそうな気がちょっとした。
- ・委員A だからたぶん、戦略Aの方に、「多様な生き方を認め合う人々が増えている」という項目が、必要と思う。
- ・座長 では、またそのへんをもう一度検討していただきたい。
- ・委員C 全然関係ない話をさせていただく。毎日放送4チャンネル「せやねん！」という番組が毎週土曜日にやっているが、ちょうど一枠もらえることになった。3ヶ月間若手芸人がうちに住み込んで、豊岡のアピールを毎週5分ずつしていただける枠を取った。竹野町の移住ポイント、豊岡市の移住ポイントを紹介して、豊岡市の市長にもぜひ出ていただきたいとオファーを貰っているが、何をアピールしたら良いか？ 前回、和歌山県田辺市のほうで第1弾を終えており、第2弾に竹野を選んでもらった。
- ・座長 それでは、これは大交流とTTIで相談に乗らせていただき、その番組自体のPRを防災行政無線で流すことにしたい。
- ・委員A たぶん、情報の出し方の順番が結構大事で、アートセンターとかは後の方にして、こんなまでであるの！？みたいな感じが良い。城崎温泉とか最初のほうにドーンと出してという風に、すごい戦略を大交流と練っていただきたい。
- ・委員C まさに移住を紹介したいというので、前回は行政の手厚い移住サポート、住宅補助、子どもの医療費補助、開業支援など紹介させてくださいというようなことを言われていた。
- ・座長 全勢力をつぎ込んで頑張りましょう。この戦略の3を作るオーソライズするうえで、この会はどういう位置づけになっているか？



・地方創生課長 特に修正がなければ、この会でオーソライズではないが、お認めただけで、内部で調整して確定ということなる。

・座長 ではそんなことでよろしいか。今いただいたご意見を踏まえて、再度修正する箇所があるかないか、それは座長と事務局にお任せいただく。いただいたご意見は、これから先何を入れるかということや、実際に作戦を遂行する上で、どういうポイントに注目してやるかということに少なからず役立っただろうと思う。今日のポイントとして、「センスの良さ」があった。先ほど、よさこいの話とかあったが、「豊岡ってセンスがすごく良いよね」とか、「レベルが高いよね」というものをもっともっと磨いて打ち出していくのも、とても大切なことだと感じた。

例えば、今年の9月に城崎怪談をやる。これは、去年、城崎の旅館にインターンシップに来た観光系の学生たちから「街全体をお化け屋敷にしたらおもしろいやんか」と提案があったので、それを城崎のまちが面白がってやろうやろうとなった。しかし、お金がないがないので、行政に願い寄ってきてやることになった。平田さんに相談すると、お化け屋敷や怪談のプロデュースはやっぱり本当に良い人にやらしてもらおうとなって、前田司郎さんという三島由紀夫賞と向田邦子賞と岸田國士賞を総なめした人が全体のプロデュースをして、俳優もプロが来る。ただし、段取りだとかは学生にやらせよう。狙いは、お客さんに来てもらって儲けることではなく、その学生たちとの関係を強めるということを、実は秘められた目的にやろうとしている。今年状況を見て、第2回、第3回をやるのか、あるいはまた別の形でやるのかを考える。城崎あるいは豊岡に行くと、非常にセンスの良い事を、自分たちが実際に関わってできると。若くても、閉鎖的でなくて、まちづくりの表舞台に出て、やるべきことができ、そのことよって自分がこのまちにいることに意味がある、そういう動きができればなというふうに思っている。

というようなことで、さらにがんばっていきたいと思っている。では、これで終わりたい。